

新田・南坪横穴墓群発掘調査概要報告書

—市道建設に伴う緊急発掘調査—

1988

掛川市教育委員会

新田・南坪横穴墓群発掘調査概要報告書

—市道建設に伴う緊急発掘調査—

1988

掛川市教育委員会

例　　言

1. 本書は、昭和62年6月22日から昭和62年10月13日まで現地調査を実施した静岡県掛川市高御所字南坪1380番地外に所在する新田横穴墓群A群、南坪横穴墓群B群の発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は市道改良に伴う緊急発掘調査で、掛川市が費用を負担し、掛川市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査に際しては、周辺土地所有者をはじめ、高御所地区の方々に多大なご理解とご協力を頂いた。
4. 発掘調査及び本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会の松本一男が行った。
5. 発掘調査事業業務は、掛川市教育委員会教育長伊藤昌明・社会教育課長安達啓・文化係長岩井克允のもとに社会教育課が所管した。
6. 発掘調査によって得た資料は、すべて掛川市教育委員会が保管している。

凡　　例

1. 掘図における方位は、磁北を示す。
2. 本書で使用する遺構名称は、次の意味である。
SD：溝状遺構 SF：土壤
3. 本書で使用する遺構番号は、現地調査時のものをそのまま使用した。

目 次

例 言	
凡 例	
I 発掘調査と遺跡の概要	2
1. 調査に至る経過と調査の目的	2
2. 調査の方法と経過	2
3. 歴史的環境	3
II 調査の概要	4
1. 遺 構	4
2. 遺 物	11
III まとめにかえて	13

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図	1
第2図 遺構全体図	5
第3図 新田3号墓実測図	15
第4図 南坪4号墓実測図	16
第5図 南坪10号墓実測図	17
第6図 南坪11号墓・15号墓墓前域実測図	18
第7図 南坪12号墓墓前域出土遺物平面実測図	18
第8図 南坪15号墓実測図	19
第9図 磁床平面実測図（1）	20
第10図 磁床平面実測図（2）	21
第11図 磁床平面実測図（3）	22
第12図 磁床平面実測図（4）	23
第13図 新田1号墳実測図	24
第14図 S F01実測図	25
第15図 S D01実測図	25
第16図 出出土器実測図（1）	26

第17図 出出土器実測図（2）	27
第18図 出出土器実測図（3）	28
第19図 出出土器実測図（4）	29

挿 表 目 次

第1表 橫穴計測表	30
-----------	----

図 版 目 次

図版I (上)	新田A群1号墓（左）・2号墓（右）全景
(下)	新田A群2号墓（左）・3号墓（右）全景
図版II (上)	新田A群2号墓全景
(中)	新田A群2号墓・3号墓墓前域全景
(下)	新田A群3号墓土器出土状況
図版III (上)	南坪B群1号墓～12号墓全景
(下)	南坪B群13-A号墓～15号墓全景
図版IV (上)	南坪B群4号墓墓前域土器出土状況
(中)	南坪B群5号墓（右）・6号墓（中央）全景
(下)	南坪B群8号墓玄室内
図版V (上)	南坪B群10号墓（中央）・11号墓（右）全景
(中)	南坪B群12号墓全景
(下)	南坪B群13-A号墓（左）・13-B号墓（中央）・14-A号墓（右）全景
図版VI (上)	南坪B群13-A号墓蹠床
(中)	南坪B群14-A号墓（左）・14-B号墓（右）墓前域全景
(下)	南坪B群15号墓全景
図版VII (上)	南坪B群15号墓蹠床
(中)	南坪B群16号墓（左）・17号墓（右）全景
(下)	南坪B群17号墓蹠床



1. 新旧横穴群・南坪横穴群
2. 岡津横穴群A群
3. 岡津横穴群B群
4. 本村横穴群A群
5. 本村横穴群B群
6. 山麓横穴
7. 宇洞ヶ谷横穴
8. 上山古墳群
9. 丈山横穴
10. 大谷代横穴群

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡分布図

I 発掘調査と遺跡の概要

1. 調査に至る経過と調査の目的

今回の調査の対象となった新田横穴墓群A群、南坪横穴墓群B群は、掛川市高御所地区に所在する横穴墓（以下、横穴と略す）群である。この高御所地区は、古くから多くの横穴群が所在することで知られた地区で、中でも大谷代横穴群、本村横穴群などは代表的な横穴群である。

新田横穴群や南坪横穴群のあるところは、市道脇の山裾にいくつも穴が開口しており、地元の人たちは、この穴が遺跡としての「横穴」であるとは知らなかったものの、穴を「博打穴」とか「防空壕」と言っていて、穴そのものの存在は知っていたようである。

今回、これら横穴の脇を通る市道領家高御所線が狭小となつたことから、市土木課によって道路拡幅と路線整備が計画され、多くの横穴の消滅が免れない状況となつた。

そこで、掛川市教育委員会は、市土木課と遺跡の取り扱いについて協議を行い、その結果道路整備計画に変更が望めないことから、遺跡の記録保存を目的とした発掘調査を行うこととなつた。

2. 調査の方法と経過

調査では、まず最初に重機を使用して山地に堆積した表土を剥ぎ取る作業を行つた。この重機による表土の剥ぎ取り作業は、山の上部、山稜上から削り始め徐々に下がるように削り、最後に山裾の表土を剥ぐという具合に行つた。表土の剥ぎ取り作業に続き、人工による粗掘削作業を行い、さらに精査し、横穴の所在状況を確認した。

この結果、新田横穴群A群側において4基、そして南坪横穴群B群側において19基の横穴を確認した。調査は、現地の状況を踏まえ南坪横穴群側から開始し、南坪横穴群の調査がある程度終了した段階で新田横穴群の調査に着手した。

なお、調査では西端で発見された横穴から番号を付け、横穴個々の掘削を行い、遺物の出土状況や横穴自体の図化作業を必要に応じ適宜行った。以下に調査の経過を記述する。

昭和62年6月22日 供養祭を行い、続いて重機による表土の剥ぎ取り作業を開始した。

～7月8日 南坪側の山稜上から西側斜面、山裾までの表土を剥ぎ取り、南坪横穴群側において19基、新田横穴群側において4基の横穴墓を確認した。

～9月12日 南坪横穴群の横穴と尾根上から発見された土壙墓等の掘削を行い、発見した遺構や遺物の写真撮影、図面作成等を行つた。

9月16日～10月12日 新田横穴群について、掘削、精査、写真撮影、作図等の作業を行つた。

10月13日 現地でのすべての作業を終了し、調査完了とした。

3. 歴史的環境

市内の古墳は、古墳時代中期の木棺直葬墳から、後期になると横穴と横穴式石室墳の2種類の墓制に変化する。

市内のほぼ全域に横穴が分布するのに対し、横穴式石室墳は市の北部と南部に分布するにすぎない。横穴は、県内では、伊豆半島と並ぶ集中箇所であり、現在まで約850基の存在が確認されている。

市内の横穴の特徴は、断面形状が尖頭形を呈するものとドーム形を呈するものの2種類が存在することである。この2種類の横穴は分布を異にしていて、ほとんど混在することはない（第1図参照）。

今回調査の対象となった新田横穴群、南坪横穴群の周辺は、細長い丘陵が沖積地にあたかも指を広げたようにせまる地形をしている。そして、その細長い丘陵に数多くの横穴群が分布していて、山を開墾して茶園を造成した時などに土器や玉などが出土している話を聞くことがある。

今回の調査地周辺の横穴式石室墳は、昭和6年に編纂された『静岡県史』に記載がある丈山古墳群がある。丈山古墳は、小笠山に産出する円礫を用いたもので、石室内から須恵器提瓶・高环・平瓶が出土している。

横穴では、昭和39年の東海道新幹線の工事中に発見された丈山横穴がある。丈山横穴は、断面ドーム形を呈し、奥壁に沿って石棺が造り付けられていて、築造時期は6世紀末頃と考えられる。昭和39年には、市の屎尿処理場建設に伴い宇洞ヶ谷横穴が発見され、調査された。この横穴は、玄室の断面ドーム形、最大幅4.36m、長さ6.1～6.4m、高さ約2.6mを測る。玄室の中央に幅3m、長さ4.5m、高さ0.9mの巨大な造付石棺を有する横穴であり、鏡や金銅装飾り大刀、馬具などの副葬品から、首長層の墓と考えられている。昭和43年には、区画整理事業に伴い山麓横穴が発見された。この横穴からは、金銅装の馬具が出土していて、出土遺物から宇洞ヶ谷横穴より古い時期の築造と考えられる。この宇洞ヶ谷横穴と山麓横穴は、単独で築かれていた横穴である。

昭和41年に東名高速道路建設に伴い、本村横穴群A群・B群の横穴群が調査された。この2つの横穴群は、同一丘陵の反対側の斜面に築かれていた。A群は、ドーム形を呈する4基が調査され、B群は、尖頭形を呈する7基が調査された。この断面形を異にする横穴群は、築造の時期に差があると解釈され、A群は6世紀の中頃、B群は7世紀中頃とされる。このうち、A群4号墓出土の須恵器台が注目され、この横穴は市内最古のものと考えられる。

また、この本村横穴群が存在する丘陵の尾根から古墳時代中期の木棺直葬墳が検出されたことにより、中期と後期は墓域を同じくすると認識されることになったのである。

昭和55年度には、静岡県教育委員会により、奥壁形尖頭形・アーチ形を呈する大谷代横穴群の学術調査が行われた。大谷代横穴群は、A～D群の4群から成る。この調査により、A群は25基、B群は19基から成ることが確認されたが、C・D群は調査されていないため、基數は不明である。6世紀後半から築造を開始するが、終末については、未詳である。

II 調査の概要

今回の調査では、新田横穴群A群4基、南坪横穴群B群19基の計23基の横穴墓と、古墳1基等が確認された。横穴からは、土器・装身具・鉄製武器などが出土し、古墳の主体部からは鉄製刀子が出土した。

ここでは、遺構と遺物の概要を述べる。

1. 遺 構

i) 横 穴

新田横穴群A群

北東を向く丘陵斜面に築かれた横穴群で、その総数は未確認である。今回、4基の横穴を調査した。

1号墓（第9図）

横穴の墓前域は、右壁部分が残るだけで、全容を知り得ない。横穴は、右壁から約1mの位置に穿たれている。

横穴の内部は、近現代に「芋穴」として利用されていたために、横穴の上半部分の改変が著しい。主軸は、西南西を向く。奥壁は、尖頭形を呈する。横穴の形は、奥壁の幅が最も広く、羨門に向かい徐々に幅が狭くなる羽子板状を呈する。玄室の側壁と前壁との境は屈曲することなく、ゆるやかに弧を描く程度である。玄門と羨道の境は、明瞭ではない。

玄室内は、奥壁から1.14mのところまでが7cmほど高くなった棺座となっていて、その上に5cmから15cm程度の大きさの自然礫が敷かれた礫床となる。奥壁沿いの右壁際の礫床上から刀子が1点出土した。

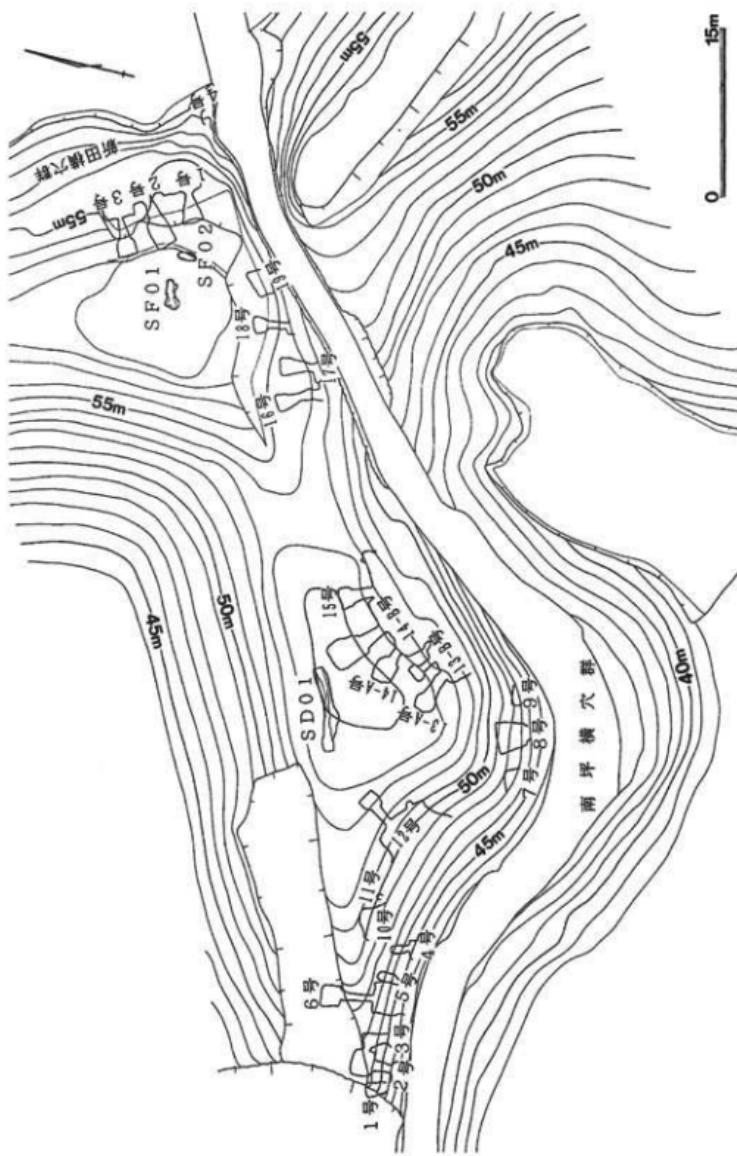
閉塞石は、原位置を保つものは存在しなかった。

2号墓

1号墓の北側に約3mの間隔をおいて築かれた横穴である。墓前域は、1号墓の墓前域より20cmほど低くなり、1号墓・3号墓の墓前域と切り合ってて壁を欠いているため、規模は不明である。2号墓の墓前域から3号墓の墓前域にかけて、大刀、土器、5~10cmの大きさの礫、15~20cmの大きさの細長い礫が検出された。これらは、2号墓内から搔き出されたものである可能性が高いと考えられる。

玄室の奥壁形は、尖頭形を呈する。玄室の平面形は、中央部分がもっとも幅広くなる胴張り形である。羨道部分の側壁が直線的で、玄室部分の側壁がふくらみを持っているため、羨道と玄室の境は明瞭である。ただし、玄室の側壁と前壁の境は、不明瞭である。玄室の右壁のふくらみに比べ、左壁のふくらみが大きいことから、左片袖型の玄室の可能性も考えられる。

玄室内には、奥と手前に棺座がある。奥壁から95cmのところで15cmの段が付き、さらに、そこ



第2図 遺構全体図

から1.3mのところで5cmほどの段が付く。手前の棺座の縁に沿って、深さ5cmの溝状のものがある。羨道内の羨門近くにも、深さ4cmの溝状のものがある。羨道中央から、5~15cmの大きさの礫約10点が、掘り方から浮いた状態で検出された。横穴内からの出土遺物はない。

3号墓（第3図）

2号墓の北約2.3mのところに位置し、墓前域は2号墓のそれより、10cmほど低くなる。規模は、幅2.65m、長さは2m以上と考えられる。横穴は、墓前域の中央、壁から1~1.2mの位置に穿たれている。

玄室の奥壁形は、尖頭形を呈する。玄室平面形は、奥壁の幅がもっとも広く、前壁幅がもっとも狭くなる逆台形を呈する。玄室側壁と前壁との境、玄室と羨道の境も明瞭な両袖型の玄室で、1号墓・2号墓とは平面形が異なっている。

玄室は、羨道より10cmほど高く造られている。羨道の右壁沿いから第16図-1~9の須恵器がまとまって出土した。また、篠にかけた羨道の土から鐵錐片が出土した。

閉塞石は、掘り方から約90cmの高さまで残存していた。上端の礫は、検出状況・縦断面の観察から、積み直されていることが明白である。

4号墓

道路により横穴の大半を削り取られていて、概要を知りえない。

南坪横穴群B群

新田横穴群A群と同じ丘陵の反対斜面に造られた横穴群で、19基の横穴と横穴状の遺構2基、墓前域土器出土遺構1基、の計22の遺構を調査した。調査に着手した時点で、すでに道路や畑にするために丘陵が削られている部分があり、消滅した横穴の存在が考えられることから、この群を構成する横穴の実数はさらに多かったと考えられる。

ここでは、各横穴の概要を述べる。

1号墓（第9図）

調査区の最西端に位置する。道路で削り取られていて、全容を知りえない。現存する横穴の平面形は、羽子板状を呈し、奥壁形は、アーチ形を呈する。奥壁から左壁にかけて、排水溝がめぐる。左壁の奥壁寄りの位置から、20~25cmの細長い礫が3点検出された。2号墓のような礫床が、本来存在した可能性がある。

横穴内から、須恵器瓶類の体部小破片が出土した。

2号墓（第9図）

1号墓と約1mの間隔をあけて並ぶ。横穴の前面を道路で削り取られているため、全容は不明である。

玄室の奥壁底面のレベルは、1号墓と同じである。奥壁形は、アーチ形を呈し、玄室の平面形は、隅丸の方形を呈する。玄室と羨道の境は、明瞭である。玄室は両袖型で、左壁と前壁の境は屈曲し明瞭であるが、右壁と前壁の境は屈曲しない。

横穴内は擾乱を受けていたが、玄室右壁奥壁沿いと左壁の玄門寄りには、10~20cmの礫を敷い

た疊床が残存していた。玄室の奥壁沿いには、排水溝がめぐらされ、その溝には、疊で蓋がされていた。

横穴内からの出土遺物はない。

3号墓

2号墓と約2.2mの間隔をおく。前面を道路で削り取られているため、全容は不明である。

奥壁の底面のレベルは、2号墓より約90cm高くなる。横穴内の右壁奥は、攪乱により2号墓の左壁中央と連結していた。奥壁形は、アーチ形を呈し、平面形は、羽子板状を呈する。平面形において、左壁の奥から1.23mの位置に玄室と羨道の境と思われる変換点が見られるが、右壁・天井が原形をとどめていないため、断定はできない。

横穴内からの出土遺物はない。

4号墓（第4図）

1～6号墓の一群のなかで、最東端に位置する。墓前域から横穴本体まで残存していた。墓前域は、幅1.71m、長さは、残存状況の最も良い部分で84cmを測る。横穴は、この墓前域の中央に穿たれている。

奥壁形は、アーチ形か台形を呈するものと思われ、平面形は、羽子板状を呈する。奥壁の高さが、推定で60cm前後と天井の低い横穴である。玄室と羨道の境は、判然としない。

羨門に、幅約10cm、深さ約10cm、長さ74cmの溝がある。この溝を境に横穴内と墓前域では、約5cmの段差がある。この溝は、閉塞の際に木板をはめ込むためのものと考えられる。この横穴からは、閉塞石は検出されなかった。

墓前域の右壁沿いから、第16図-10～第17図-21の土器が一括出土した。

5号墓（第9図）

6号墓の東に隣接し、6号墓の墓前域により、5号墓の右壁の大半が破壊されたと判断される。横穴の平面形は、奥壁部分の幅が最も狭い台形状を呈する。奥壁は、完存していて高さ27cmを測り、アーチ形を呈する。内部からは、5cm前後と、10～15cmの2種類の大きさの疊が検出されたことから、2種類の疊床が存在した可能性がある。

籠にかけた土の中から、耳環2が出土した。

6号墓（第10図）

3号墓と約1m、4号墓と約2.3mの間隔をおいて造られている。墓前域は、幅約2.8m、長さ約3.2mが残存していた。横穴は、墓前域の中央に穿たれていた。

奥壁形は、尖頭形とアーチ形の中間を呈する。玄室平面形は、方形を呈する両袖型である。玄室内からは、10～30cmの大きさの疊を使用した疊床が検出されたが、攪乱を受けていて疊の上面に凹凸が生じていた。奥壁から玄室左壁沿いを通り、羨道の中ほどまで排水溝が延びていた。羨道の長さは、2.80mを測り、今回羨道の長さを確認できた横穴の中で最長である。閉塞石は、この羨道の中間部分に存在した。

横穴内からは、耳環1、小刀賣金具が出土した。

7号墓（第10図）

7～9号墓の3基は、丘陵の張り出した部分に造られた一群で、道路による削平が著しく、横穴の残存状況は良好ではなかった。

7号墓は、奥壁の左壁部分が残るのみである。内部からは、15～35cmの大きさの礫が10点近く検出されたが、搅乱により礫の上端に凹凸が生じている。横穴内から、はばき？、鐵鎌が出土した。

8号墓（第10図）

玄室と羨道の一部が残存するだけである。奥壁形は、尖頭形を呈する。奥壁の幅2.81m、高さは現存で2.25m（推定2.4m前後）を測り、今回奥壁の規模が判明している横穴の中で最大である。奥壁に沿って、幅60cm、厚さ10～13cmの地山の堆積砂を切り出したブロックが數かれていて、ブロックの前に礫が4点散在した。

奥の3点の礫から玄門にかけて、土器小破片、刀子、小刀、鐵鎌、両頭金具などが出土した。また、簡にかけた土の中から、ガラス玉9、耳環2が出土した。

9号墓（第11図）

9号墓は、奥壁の右壁部分が残るだけで、内部から15～35cmの大きさの礫が検出された。

横穴内からは、須恵器片、刀子、鐵鎌が出土した。

10号墓（第5図）

1～6号墓より一段高い位置に斜度6度程度の平坦面があり、その平坦面から第17図～22の土師器甕と礫1点が発見された。平坦面の最奥部は、天井までの高さ22cmを測る。

土師器甕の中から、火葬によると考えられる骨粉と、長さ8mm、直径1mmの鉄製品が発見された。

11号墓（第6図）

10号墓の東0.5mほどに位置する。幅約60cm、奥行き約50cmの横穴状で、12～16cmの大きさの礫が3点検出された。

出土遺物はない。

12号墓（第7図・11図）

今回調査した南坪横穴群B群で南向きに開口する横穴の中で、最高所にあたる。

墓前域は、幅約5.2m、長さ1.5m以上である。12号墓は、この墓前域の幅を3等分した位置にあり、12-B号墓は3等分した場所より若干東に位置する。

墓前域から、第17図～23～第18図～27の土器が出土した。

奥壁は、上半を欠損するが、アーチ形の可能性が高い。玄室の平面形は、奥壁幅が広く前壁幅が狭い逆台形（左壁の中央がふくらむが）を呈する両袖型である。羨道に閉塞石は見られず、墓前域に挿き出された状態であった。

横穴内から、須恵器瓶類・甕の破片が出土した。

12-B号墓（第7図）

12号墓と約1.7mの間隔をおき開口する、横穴状の遺構である。開口部の幅55cm、全長33cm、天井はほとんど崩落しているが、ドーム形を呈するものと考えられる。

内部施設・出土遺物ともない。

13-A号墓（第11図）

13-A～15号墓までの5基は、墓前域の共有関係と高さから、13-Aと13-B号、14-Aと14-B号、15号墓の3つに分けることができる。

13-Aと13-B号の2基の横穴は、幅約3.8m、現存の高さ2.1mの墓前域を共有する。どちらの横穴が先行して造られたかは、明らかではない。

奥壁形は尖頭形を呈し、玄室は隅丸方形を呈する。左片袖のように見える平面形である。横穴は、すでに擾乱を受けていて、礫床は玄室の中央に残存していた。礫床には、10cm以下の小石が使われていた。奥壁から左壁沿いに、排水溝がめぐるようである。

閉塞石は、羨門から奥、1.3mにわたり積まれていた。

横穴内からの出土遺物はない。

13-B号墓（第11図）

奥壁形は台形を呈し、玄室は隅丸長方形を呈する。玄室内には、礫床が存在した。礫床に使用されている礫は、ほぼ主軸上を境に左右で大きさが異なる。左壁側では、10～20cm前後の大きさの礫が使用され、右壁側では10cm前後の大きさの揃った礫が使用されていた。羨道左壁沿いに排水溝があり、羨門まで続いている。

左壁玄門付近から、耳環2と第18図-28・29の須恵器壺のセットが出土した。

14-A号墓（第11図）

墓前域を14-B号墓と共有する。墓前域は、現存の長さ約2.5m、幅は約5.5mが残存する。この幅広い墓前域に2基の横穴が存在するが、墓前域の底面に段差ではなく、壁面にも変換点がないことから、一時にこの墓前域は造られたものと考えられる。墓前域に取り付く横穴の位置と角度から、14-B号墓の墓前域に14-A号墓が造られた可能性が高いと考えられる。

奥壁は尖頭形を呈し、玄室平面形は長方形を呈する両袖型である。玄室中央やや奥壁寄りに、幅約50cm、長さ約1.6mの礫床が存在した。

閉塞石は、羨門から羨道中ほどにかけて存在した。

篠にかけた土の中から、鉄鎌片が出土した。

14-B号墓

横穴内から寛永通宝が出土するなど、近世以降の擾乱が著しい。

奥壁形はアーチ形が推定され、玄室平面形は、奥壁幅が広く、前壁幅が狭い逆台形を呈する。玄室長は、今回調査した横穴の中で最も長い3.10mを測る。奥壁から2.25mまでが、約20cm高い棺座となっている。奥壁中央から左壁沿いの棺座の縁まで、排水溝がめぐる。

横穴内から、鎧鉤鉄具、鎧吊り金具、両頭金具、鉄鎌が出土したが、元位置を保つものはない。

15号墓（第8図・12図）

墓前域の幅約3.5m、現存の長さ1.5mを測る。横穴は、この墓前域の西端から約60cmの間隔をあけて造られていた。

奥壁形は、尖頭形かアーチ形と考えられる。玄室平面形は、隅丸長方形を呈する両袖型である。玄室内に疊床が存在したが、疊らな部分がある。また、土器も玄室内に散乱していて、攪乱を受けたことを物語っていた。

閉塞石は、羨門から約1mの位置から検出されたが、根石部分を残すのみであった。

玄室内から第18図-30～第19図-50の土器が出土した。また、箒にかけた土の中から、刀子片が出土した。

墓前域土器出土遺構（第6図）

15号墓の墓前域の北東壁をえぐり階段状に比較的平坦な面を掘削したもので、幅約80cmを測る。墓前域の掘り方から、35cmほどの高さに1段あり、さらに20cmほどの高さに2段目が存在する。

上段の縁から、掘り方から16cm浮いた状態で、つまみ・身受けが付く須恵器壺蓋1点と、壺と考えられる土師器1点が出土した。土器以外の出土遺物はない。

16号墓

墓前域の大半を道路で削られていた。

奥壁は、崩落が著しいが、台形を呈すると考えられる。玄室平面形は、隅丸長方形を呈する。掘り方に凹凸が生じるほど、攪乱を受けていた。玄室左壁沿いの中央から、約15cmの疊が1点検出された。

羨道のほぼ中央に、閉塞石が3段分残存していた。

横穴内から、器種不明の須恵器小片が出土した。

17号墓（第12図）

墓前域と羨門部分を、道路で削り取られていた。奥壁形は、台形を呈する。横穴の平面形は羽子板状を呈するが、左壁においては玄室と羨道の区別は明瞭であり、左片袖の玄室である。玄室の全面に、疊床を設けていた。横穴内からの出土遺物はない。

18号墓（第12図）

墓前域の大半を道路で削り取られていた。墓前域の左壁から約50cmの間隔をあけて、横穴は穿たれていた。

奥壁の大半は崩落しているが、台形を呈する可能性が高い。横穴の平面形は、羽子板状である。羨道の側壁は直線的であり、玄室の側壁がふくらみを持つため、玄室と羨道の境は明瞭である。玄室の平面形は両袖型である。

閉塞石は、羨門から約50cmの位置に、根石部分だけが残存していた。

玄室内から、須恵器フラスコ形瓶の破片、土師器壺の破片が出土した。

19号墓（第12図）

奥壁近くが、幅2.22m、長さ1.25mにわたり残存していただけで、そこに疊床の残骸が見られ

た。

玄室内から、4号墓の墓前域から出土した須恵器坏身・坏蓋と同様の破片、丹彩の土師器の小片が出土した。

ii) 溝状遺構 (S D)

S D 0 1 (第15図)

南坪横穴群B群12号～15号墓が所在する尾根上から検出された。最も高い東端と最も低い西端では、約2.1mの高低差がある。確認面の幅0.7～1.4mを測り、9.40m分を確認した。

溝は、ゆるく湾曲し、覆土は上層に暗褐色砂質土、下層に暗黄褐色土である。

掘り方から浮いた状態で、細片化した土師器が出土した。

iii) 古墳主体部 (S F)

S F 0 1 (第13図・14図)

新田横穴群A群1～4号、南坪横穴群B群16～19号が所在する尾根上から検出された土壤で、西端と中央付近に擾乱を受けている。土壤は、尾根に直交し、長軸は西南西～東北東で、下場の長さ2.20m、下場の幅0.41～0.46m、確認面からの深さ8～22cmを測る。

覆土は、地山土がブロック状に混入する黄褐色砂質土である。

中央西寄りの掘り方から約8cm浮いた高さから、刀子が出土した。

S F 0 2 (第13図)

S F 0 1 の南東約2.1m、尾根から約80cm低い位置から検出された土壤である。長軸は、ほぼ南北方向である。確認面での規模は、長さ1.64m、幅0.68m、深さは最も残存の良好なところで44cmを測る。

土壤からの出土遺物はない。

2. 遺 物

今回の調査では、土器・玉類・馬具等が出土した。

ここでは、横穴群の築造と終焉の時期を示すと考えられる土器、一括性が高いと思われる土器群について、概要を述べる。

新田横穴群A群3号墓出土土器 (第16図-1～9)

これらの須恵器は、羨道の右壁沿いからまとまって出土した。1～4は坏蓋、5～8は坏身、9は足である。

1は口径11.0cm、器高4.1cm、2は口径10.8cm、器高3.9cm、3は口径10.5cm、器高4.1cm、4は口径10.1cm、器高3.9cmを測る。2の天井部中央は凹み、4の天井部と口縁部の境には沈線が巡る。

5は口径9.2cm、最大径11.3cm、器高3.2cm、6は口径9.3cm、最大径11.2cm、器高3.1cm、7は口径9.3cm、最大径11.2cm、器高3.0cm、8は口径9.3cm、最大径11.1cm、器高3.2cmを測る。すべて口縁部は内傾し、受部は短い。7の底部外面には、手持ちヘラ削りが施される。

9は口径10.1cm、体部最大径9.9cm、器高11.8cmを測る。口縁部と頸部の境と肩部に沈線が通り、注孔は突出する。

南坪横穴群B群4号墓墓前域出土土器（第16図-10～第17図-21）

これらの土器は、墓前域の右壁沿いから出土したものである。10～14は坏蓋、15～17は坏身、18はフラスコ形瓶、19・20は土師器高盤、21は土師器坏である。

10は口径15.8cm、器高3.0cm、11は口径15.4cm、器高4.0cm、12は口径15.9cm、器高3.5cm、13は口径15.8cm、器高3.5cm、14は口径15.2cm、器高3.7cmを測る。10は口縁部が開き、11～13は垂下し、14は端部が内傾する。10と13は、つまみの中央が凹む。

15は口径14.1cm、高台径7.8cm、器高4.2cm、16は口径15.4cm、高台径12.0cm、器高4.6cm、17は口径15.7cm、高台径9.6cm、器高4.7cmを測る。15・16の底部は、高台より下に張り出す。ヘラ削りは、15・17が体部に及ぶが、16は底部に限られる。

18は、口径10.9cm、体部最大径18.4cm、器高27.6cmを測り、口縁端部を受け口状に作る。

19は、口径24.5cm、底径13.0cm、器高9.6cm、20は口径16.3cm、底径8.1cm、器高5.3cmを測る。19の脚部外面は、指ナデによる面取りが施される。全面に赤彩が施される。20の体部外面には、ヘラミガキが施される。

21は口径11.5cm、器高5.2cmを測る。

南坪横穴群B群10号墓出土土器（第17図-22）

22は土師器壺で、口径19.3cm、体部最大径24.2cm、器高21.9cmを測る。口縁部の外面にナデが施され、体部外面には細かいハケ目が施される。

南坪横穴群B群12号墓墓前域出土土器（第17図-23～第18図-27）

23の坏蓋と24の坏身、26の坏蓋と27の坏身は、セットと考えられる。

23は、最大径12.3cmを測り、身受けは口縁端部より下に出ることはない。24は、口径11.6cm、器高3.7cmを測り、底部外面の縁辺部にヘラ削りを施す。

25の短頸壺は、口径4.6cm、体部最大径9.3cm、器高6.1cmを測る。肩に蓋の口縁端部片が癒着し、底部を除く外面に深緑色の自然釉が掛かる。

26は口径16.3cm、器高3.4cm、27は口径15.2cm、高台径10.3cm、器高4.1cmを測る。26・27ともにノタ目が顯著である。27の外面のヘラ削りは、底部に限られる。

南坪横穴群B群13-1号墓出土土器（第18図-28・29）

28の坏蓋と29の坏身は、セットと考えられる。

28は口径12.0cm、器高4.1cm、29は口径10.5cm、最大径12.6cm、器高4.7cmを測る。28の天井部の中央は凹み、天井部と口縁部の境には稜がある。29は、口縁部が長く内傾し、受部は短く作られる。

南坪横穴群B群15号墓出土土器（第18図-30～第19図-50）

30～36は坏蓋、37～40は坏身、41・42は平瓶、43～47は高坏、48は壺、49は長頸壺、50はフランスコ形瓶である。

30は口径10.4cm、器高4.3cm、31は口径10.2cm、器高4.3cm、32は口径10.4cm、器高3.9cm、33は口径10.0cm、器高4.0cm、34は口径9.1cm、器高3.9cm、35は口径10.4cm、器高3.8cm、36は口径10.0cm、器高3.6cmを測る。31と34は、天井部と口縁部の境に稜があり、30・32・33・36は、沈線状の稜となり、35に稜は認められない。35の口縁部内面に沈線が巡る。

37は口径8.7cm、最大径10.7cm、器高3.8cm、38は口径8.6cm、最大径10.5cm、器高3.7cm、39は口径8.7cm、最大径10.6cm、器高3.7cm、40は口径8.7cm、最大径10.4cm、器高3.9cmを測る。39の底部外面の中央は凹んでいるため、ヘラ削りが施されない。

43は口径14.8cm、底径10.2cm、器高11.7cm、44は口径15.7cm、底径10.1cm、器高11.0cm、45は口径15.4cm、底径9.3cm、器高12.2cm、46は口径15.2cm、底径9.3cm、器高12.4cm、47は口径10.7cm、底径9.2cm、器高10.5cmを測る。43の脚には、2段の長方形透かしが2方向に千鳥にあけられている。外面の口縁部と体部の境には、稜がある。44の口縁部外面には、沈線状の稜がある。45は、坏部が変形し、46は坏部・脚端部が変形する。45・46の口縁部外面には、稜と沈線が施される。47の脚部中ほどには、2条の沈線が巡る。43・45・46・47の口縁端部には、段がある。

48は、口径11.1cm、体部最大径9.7cm、器高13.4cmを測る。外面の口縁部と頸部の境に稜があり、頸部の中ほどに2条の沈線が巡る。体部外面には、櫛状工具による刺突文が巡り、刺突文の上下には幅広の沈線状の区画がある。口縁部外面に8個、頸部の沈線に5個、肩に5個の円形貼付文が施される。

49は、口径9.8cm、体部最大径18.4cm、器高27.2cmを測る。外面の口縁部と頸部の境に稜、体部最大径の上下に2条の沈線が巡る。

50は、口径8.5cm、体部最大径16.2cm、器高22.0cmを測る。

III まとめにかえて

ここでは、今回の調査の成果と課題を挙げ、まとめにかえたい。

横穴は、道路により削り取られたり、後世の改変を受けたりしていて、残存状況は決して良好とはいえないが、群を把握することができた。

新田横穴群A群4基は、同一斜面に存在するが、高さから、1～3号墓、4号墓に分けられる。南坪横穴群B群は、立地から、7～9号墓、1～6・10～12号墓、13-A～19号墓に大きく分けられ、さらに2～3基で単位を構成していることが判明した。

1～6・10～12号墓は、位置と高さから、1～3号、4～6号、10・11号、12号の4つの群に分けられ、13-A～19号墓は、墓前域の共有関係、位置、高さから、13-A・B号、14-A・B号、15号、16・17号、18・19号の5つに分けられる。

これらの横穴の中には、他の横穴に比べて規模の大きなものが存在する。南坪横穴群B群8号墓は、玄室長2.63m、奥壁幅2.81m、奥壁高さ現存で2.25mを測る。奥壁に沿って、地山の堆積

砂を切り出したブロックが敷かれていた。欠失する部分が多く残存状況は良好ではなかったが、横穴内から、土器片、刀子、小刀、鉄鎌、両頭金具、ガラス玉、耳環が出土している。14-B号墓は、玄室長3.10m、奥壁幅2.30m、奥壁高さは崩落があり1.44mが残存するにすぎないが、鎧鉗、鎧吊り金具、両頭金具、鉄鎌が出土している。

8号墓は、7～9号の中央に位置し、14-B号は、13-A～15号の中央に位置することから、盟主的な存在と考えられる。

新田横穴群A群1～3号墓、南坪横穴群B群12-A・12-B号、13-A・13-B号、14-A・14-B号は、墓前域を共有する。これらの中で、14-A・14-B号の墓前域は、掘り方に段差がなく、壁面にも変換点がないことから一時に造られたと考えられる。しかし他は、掘り方と壁面の状況から、単独の墓前域が造られ、後に隣接して墓前域が造られたことにより、墓前域に切り合いが生じ、結果的に墓前域を共有しているように見えると考えられる。

玄室長に比べて羨道長の長いものが目立ち、南坪横穴群B群6号・13-A号・14-B号・15号は、長さ2mを越えるいわゆる長羨道である。この長羨道から検出された閉塞石は、羨門に積まれた13-A号、羨道の中央付近に積まれた6号・15号・16号に分けられる。これらの横穴の中で時期の判明するものは、15号墓しかないとみ、長羨道が時期的な傾向であるのか、閉塞の位置の相違が、時期差を反映しているのか、類例の増加を待ち、検討したい。

横穴の形状にも2種類が存在する。羨道と玄室の境が明瞭で、容易に羨道・玄室の区別が付くものと、境が不明瞭な羽子板状を呈するものである。従来言われている、羨道・玄室の区別が明瞭な形状から境が不明瞭な羽子板状のものへ変化する、という説を確認することはできなかった。

今回横穴として報告したが、横穴と呼称して良いか判断に迷うものが存在する。南坪横穴群B群11号と12-B号である。11号は、内部から礫が検出されたが、12-B号は内部施設・出土遺物ともに存在しない。また、10号墓は、火葬骨と思われる骨粉が入った土師器甕が出土したが、形状は横穴というよりも「ほら穴」状であり、今後の類例の増加を待ちたい。

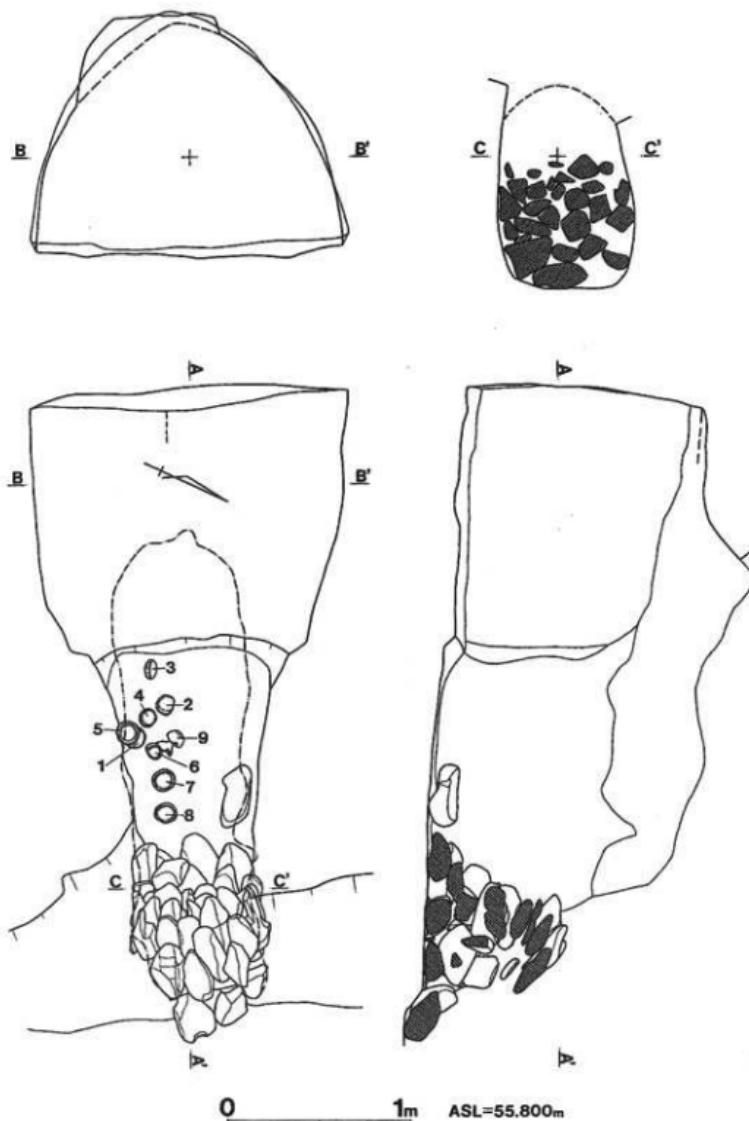
15号墓墓前域土器出土遺構は、墓前域での祭祀に関わるものと考えられるが、遺構の性格等今後検討する必要がある。

S D 0 1は、出土した土師器の残存状況が良好ではなく、時期を明確にできない。このような遺構は、市内で類例がないため、性格については不明である。

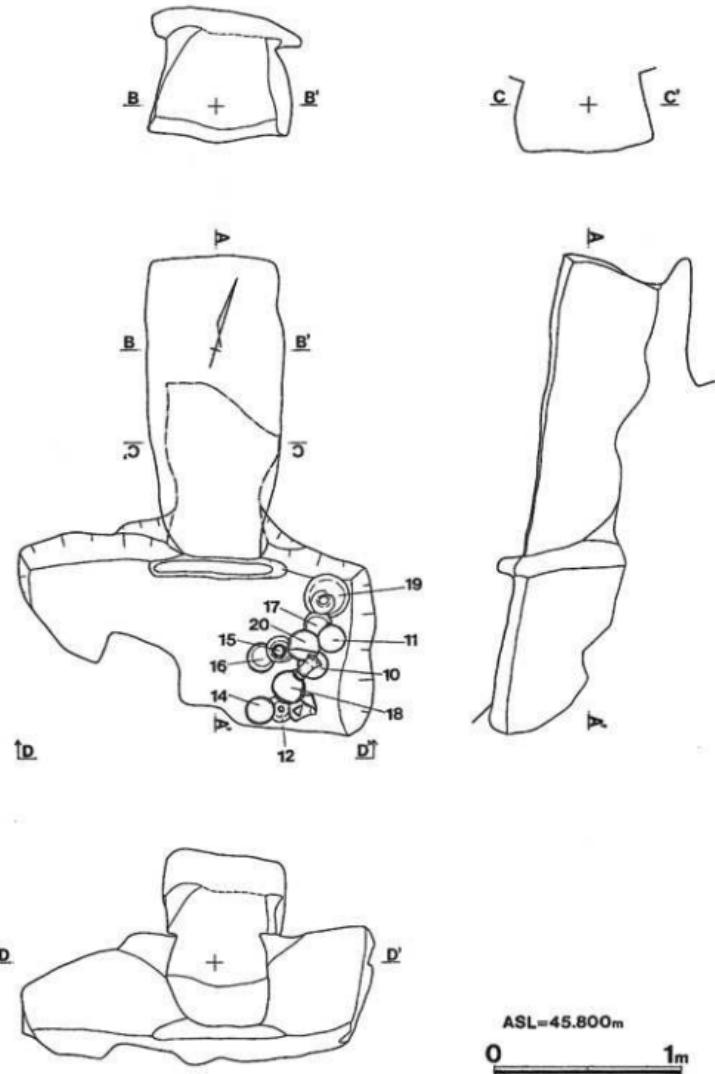
S F 0 1は、古墳の主体部と考えられるが、古墳の区画溝等の施設は調査区内では確認されていないため、古墳の規模は不明である。掘削時に盛り土を確認していないことから、地山削り出しの古墳である。

S F 0 2は、立地から埋葬土壤の可能性は低いと考えられる。

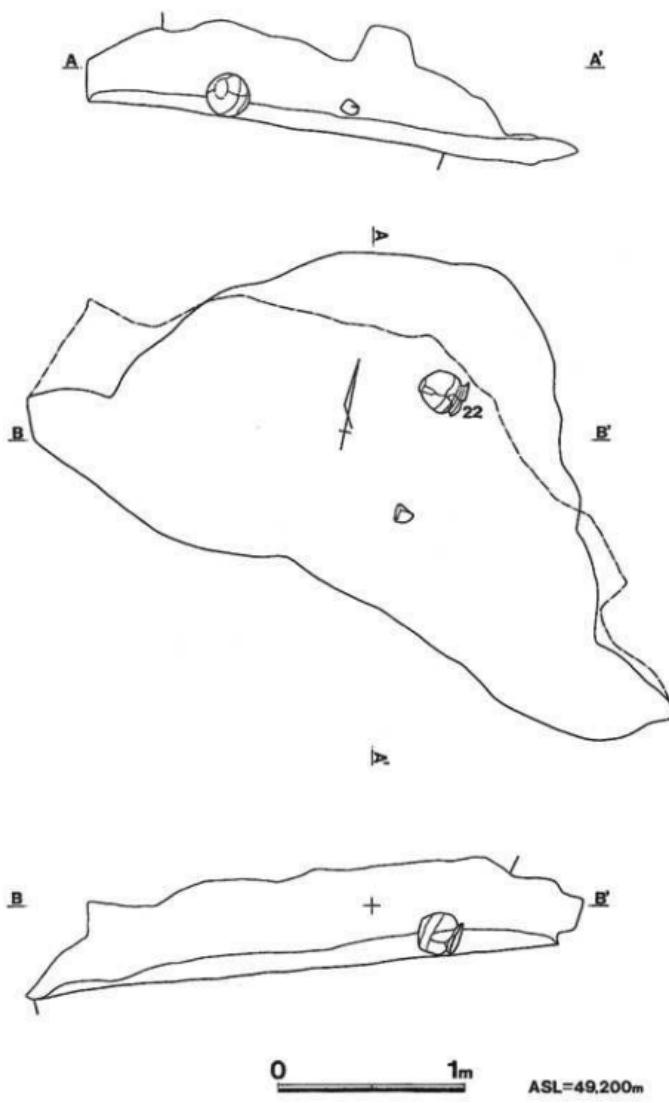
横穴群の築造時期は、新田横穴群A群が、7世紀中葉、南坪横穴群B群は13-B号墓が6世紀末、15号墓が7世紀中葉、4号墓が7世紀末～8世紀初頭、10号墓は8世紀に位置づけられると考えている。



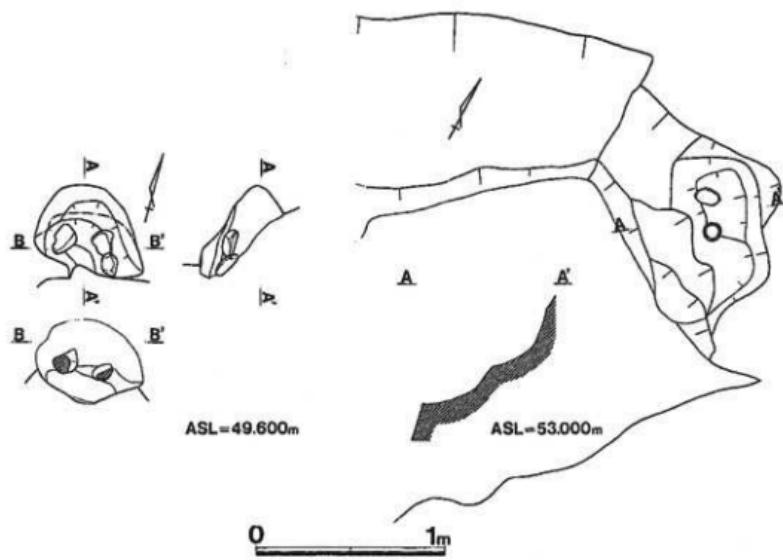
第3図 新田3号墓実測図



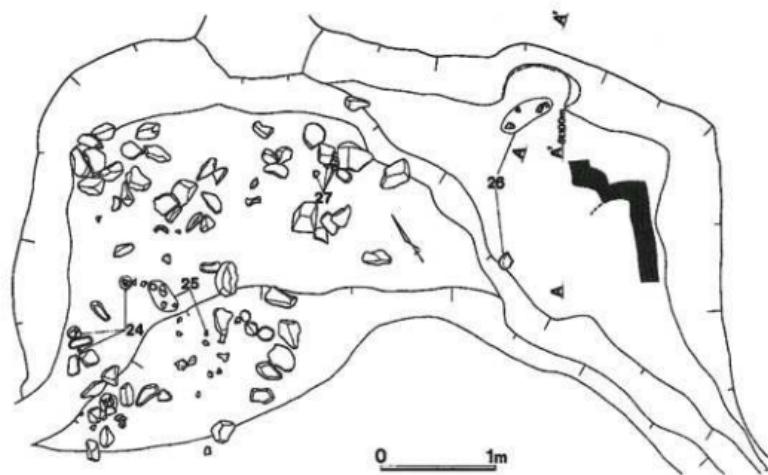
第4図 南坪4号墓実測図



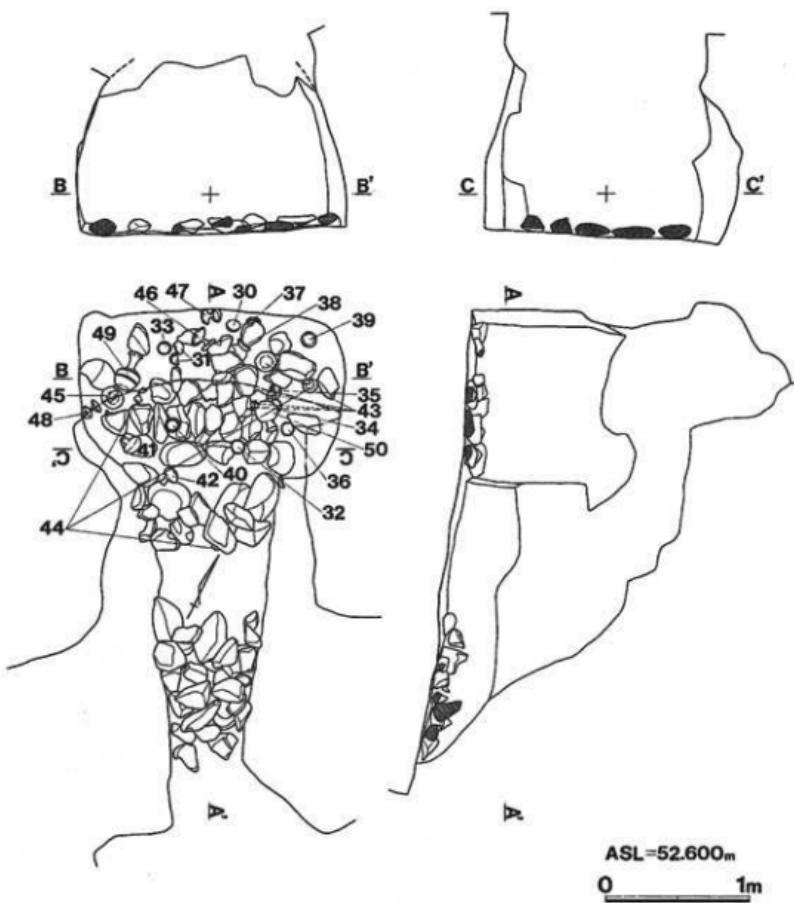
第5図 南坪10号墓実測図



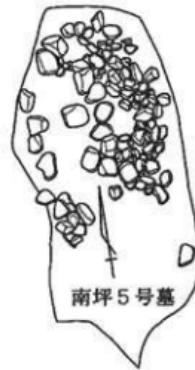
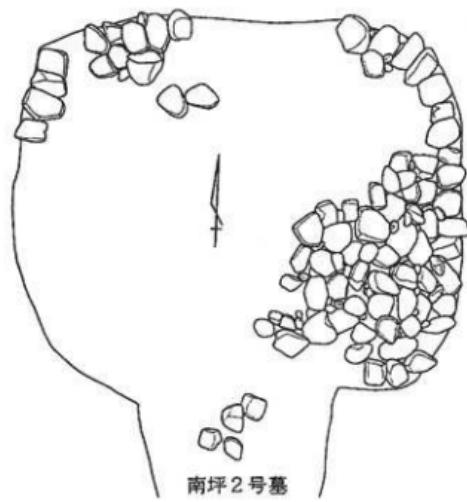
第6図 南坪11号墓・15号墓墓前域実測図



第7図 南坪12号墓墓前域出土遺物平面実測図

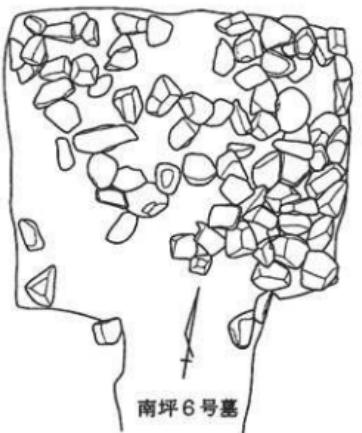


第8図 南坪15号墓実測図



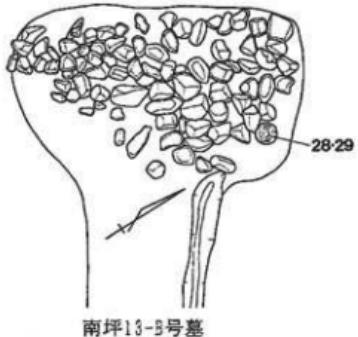
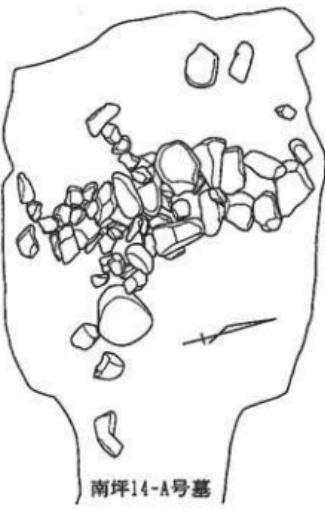
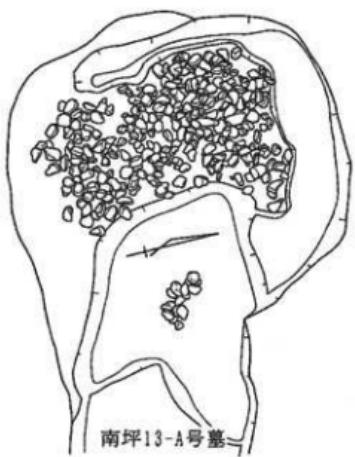
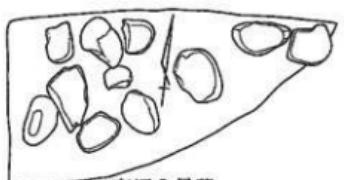
0 1m

第9図 碉床平面実測図(1)



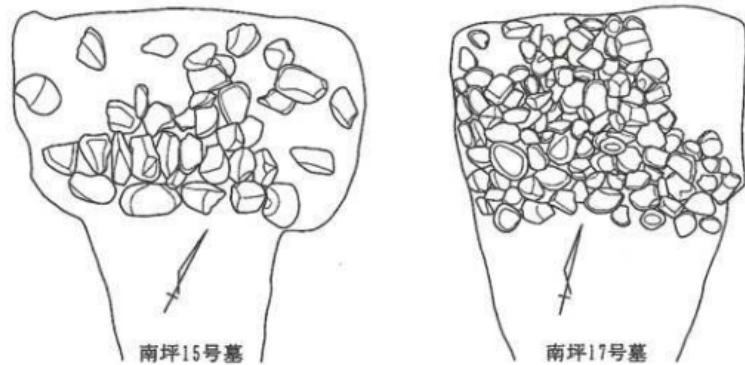
0 1m

第10図 碣床平面実測図(2)



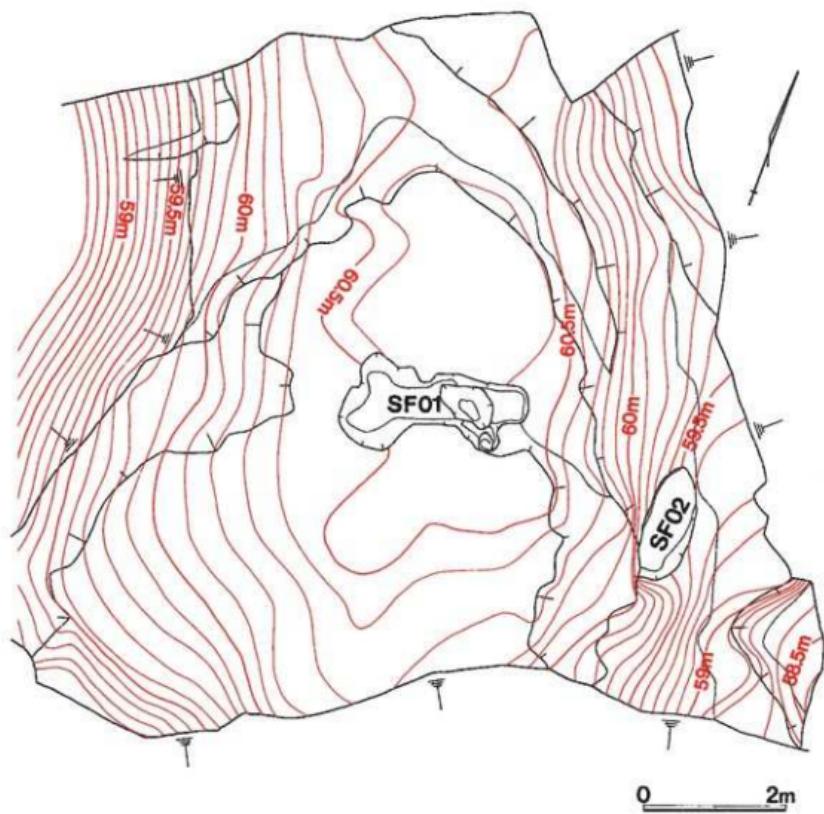
0 1m

第11図 碓床平面実測図(3)

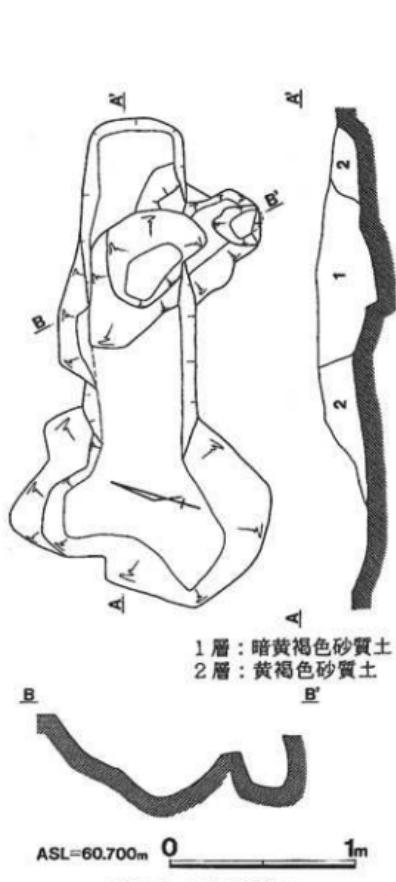


0 1m

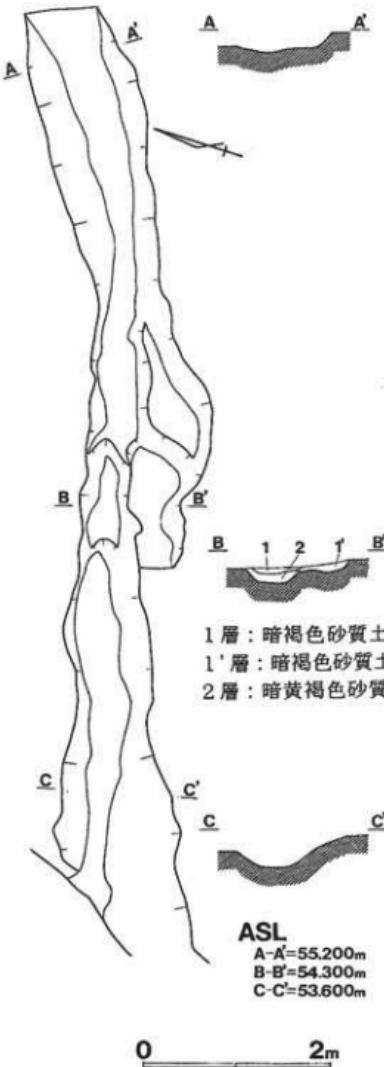
第12図 磚床平面実測図(4)



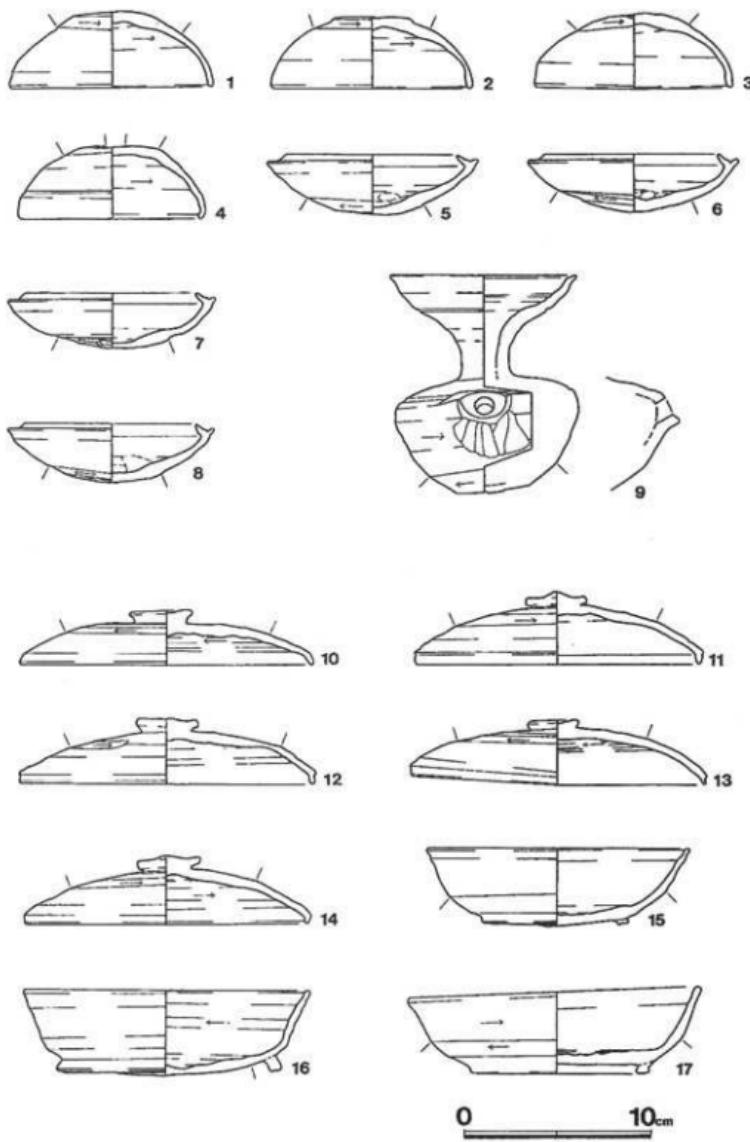
第13図 新田1号墳実測図



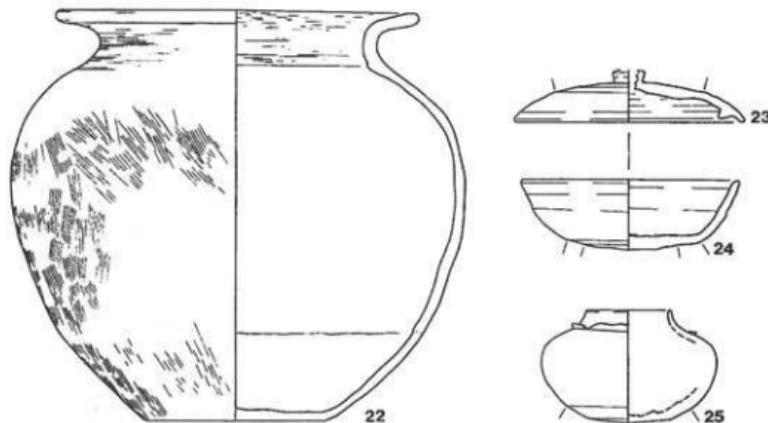
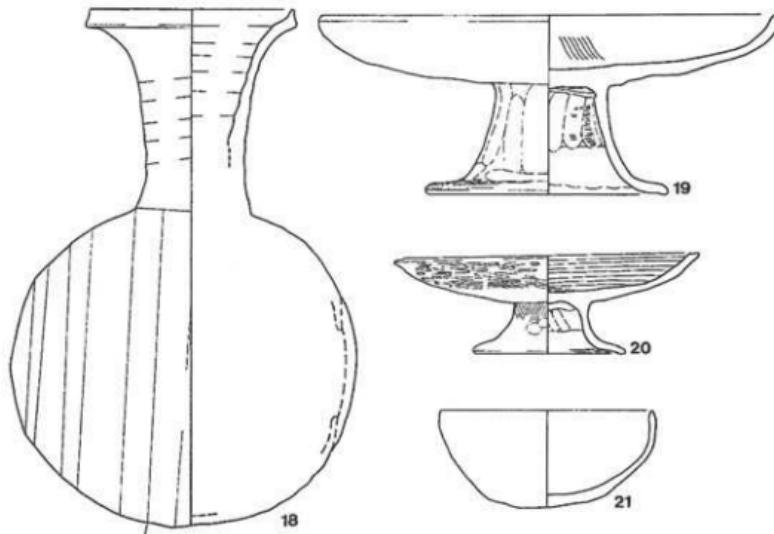
第14図 S F 01実測図



第15図 S D 01実測図

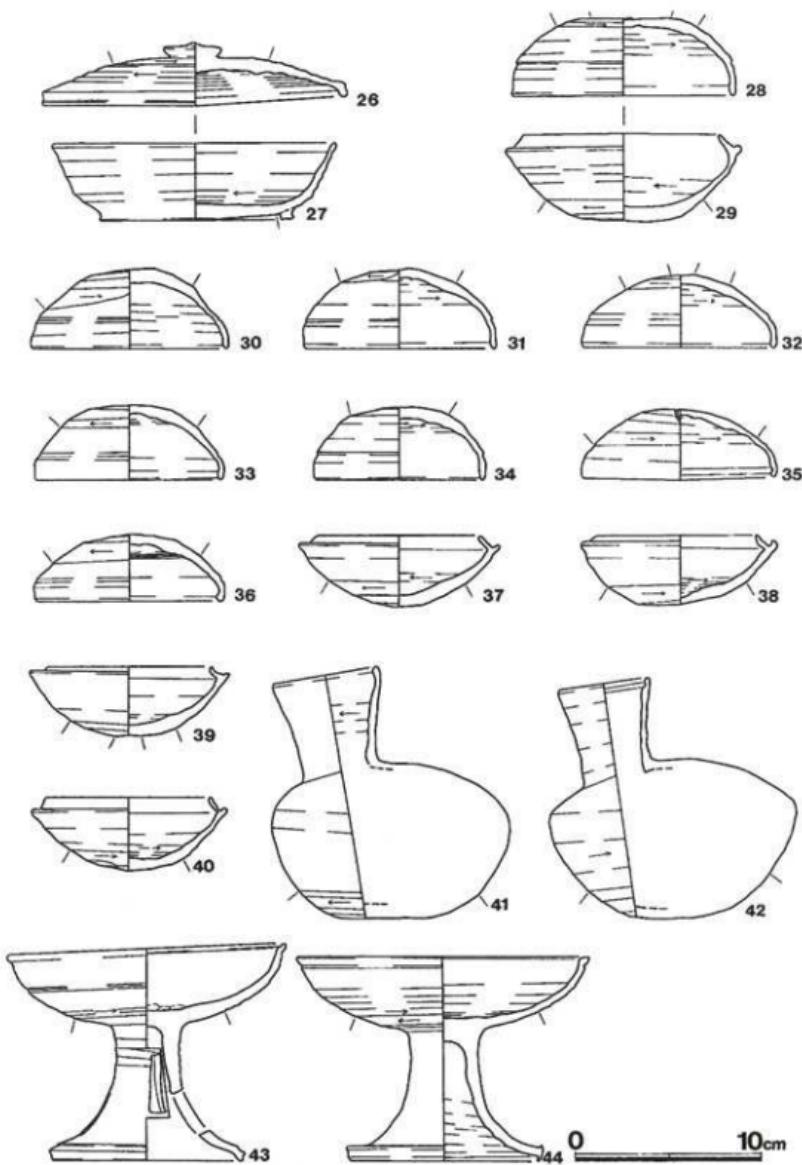


第16図 出土土器実測図(1)

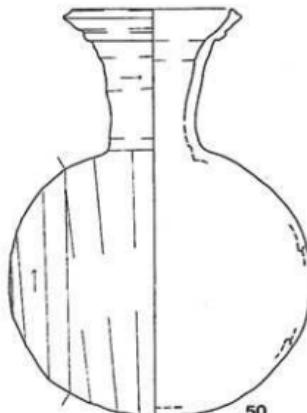
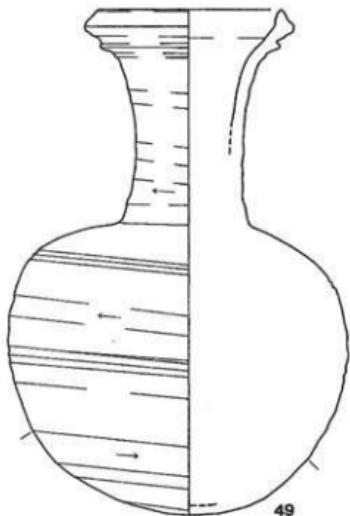
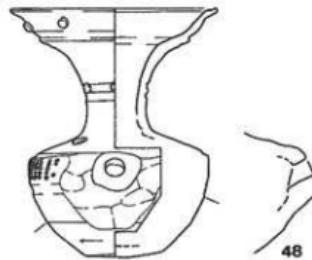
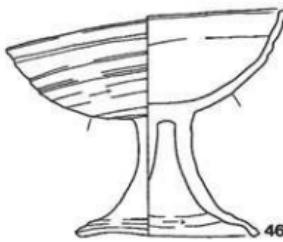
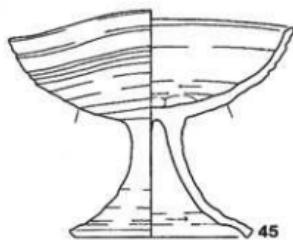


0 10cm

第17図 出土土器実測図(2)



第18図 出土土器実測図(3)



0 10cm

第19図 出土土器実測図(4)

第1表 横穴計測表

(単位: m)

	主軸方位	全長	玄室長	羨道長	奥壁幅	奥壁高	開口部幅	床面レベル
新田1号	N-114°-W	2.59	区別不明瞭		1.84	現0.97	0.59	55.60
2号	N-129°-W	4.64	2.73	1.91	1.67	1.38	0.72	55.59
3号	N-117°-W	3.27	1.45	1.82	1.73	1.28	0.42	55.31
4号	計測不能	計測不能	計測不能	計測不能	計測不能	計測不能	計測不能	50.63
南坪1号	N- 21°-W	現1.84	区別不明瞭		1.17	0.77	0.60	44.01
2号	N- 3°-W	現3.50	2.01	1.49	2.02	1.66	0.61	44.01
3号	N- 24°-W	現2.39	区別不明瞭		計測不能	現0.99	0.42	44.88
4号	N- 17°-W	1.62	区別不明瞭		0.66	現0.51	0.40	45.67
5号	N- 8°-E	現1.69	-	-	0.50	0.27	計測不能	45.25
6号	N- 9°-W	4.51	1.71	2.80	1.70	1.51	0.43	45.30
7号	計測不能	現1.57	-	-	現1.87	現0.88	計測不能	47.87
8号	N- 22°-W	現2.84	2.63	0.21	2.81	現2.25	1.15	47.92
9号	計測不能	現0.87	-	-	現1.75	現0.51	計測不能	47.88
10号	計測不能	現2.09	-	-	現2.38	現0.22	計測不能	49.02
11号	計測不能	現0.49	-	-	現0.13	現0.24	計測不能	49.48
12号	N- 33°-E	3.05	1.45	1.60	1.47	現0.61	0.48	51.01
12-B号	計測不能	0.33	-	-	0.57	現0.22	0.55	50.51
13-A号	N- 73°-W	3.82	1.59	2.23	1.43	1.36	0.83	51.89
13-B号	N- 56°-W	2.43	0.94	1.49	1.40	0.75	0.43	52.20
14-A号	N- 70°-W	3.22	1.91	1.31	1.61	1.34	0.64	52.73
14-B号	N- 46°-W	5.39	3.10	2.29	2.30	現1.44	0.65	53.37
15号	N- 27°-W	3.72	1.16	2.56	1.73	現1.16	0.50	52.35
16号	N- 31°-W	3.83	1.07	2.76	1.45	現0.45	0.49	52.98
17号	N- 14°-W	現2.65	1.00	1.65	1.55	現0.63	0.57	52.92
18号	N- 13°-W	2.92	1.23	1.69	1.45	現0.36	0.49	54.83
19号	計測不能	現1.25	-	-	現2.22	現0.59	計測不能	55.14

図 版

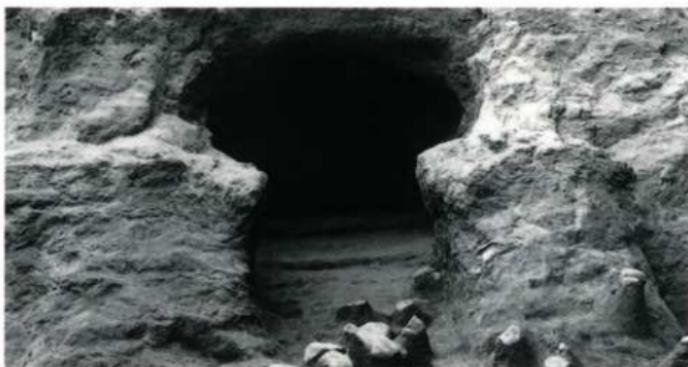


新田 A群 1号墓（左）・2号墓（右）全景

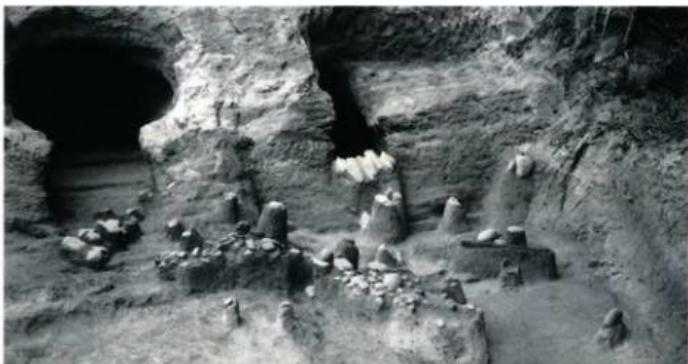


新田 A群 2号墓（左）・3号墓（右）全景

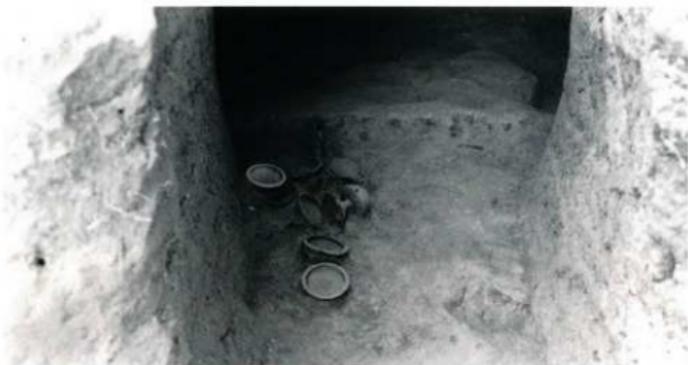
図版 II



新田 A 群 2 号墓全景

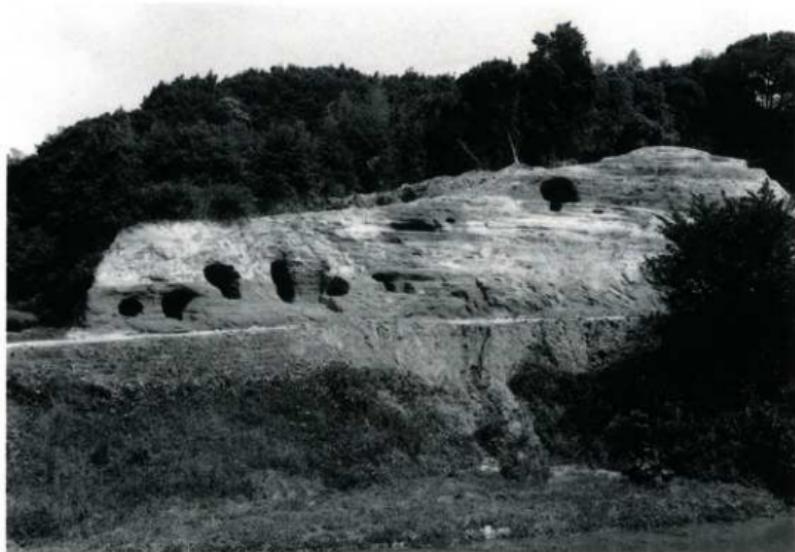


新田 A 群 2 号墓・3 号墓墓前域全景



新田 A 群 3 号墓土器出土状況

図版
III



南坪B群1号墓～12号墓全景



南坪B群13～A号墓～15号墓全景

図版
IV



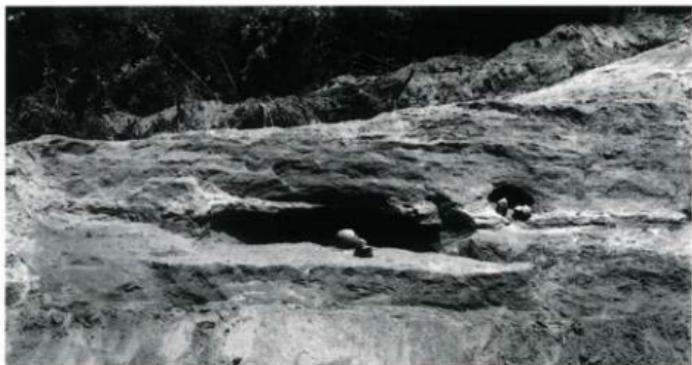
南坪B群4号墓墓前域土器出土状況



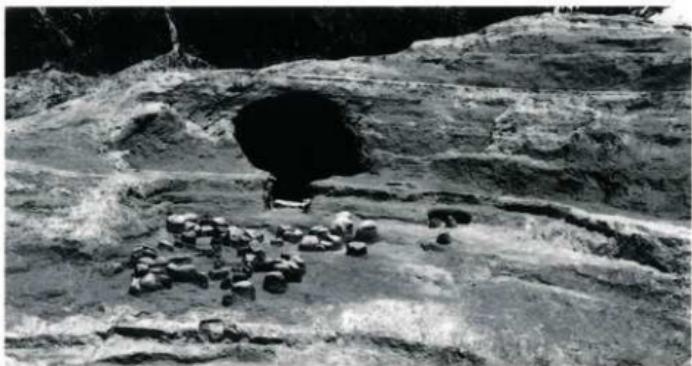
南坪B群5号墓（右）・6号墓（中央）全景



南坪B群8号墓玄室内



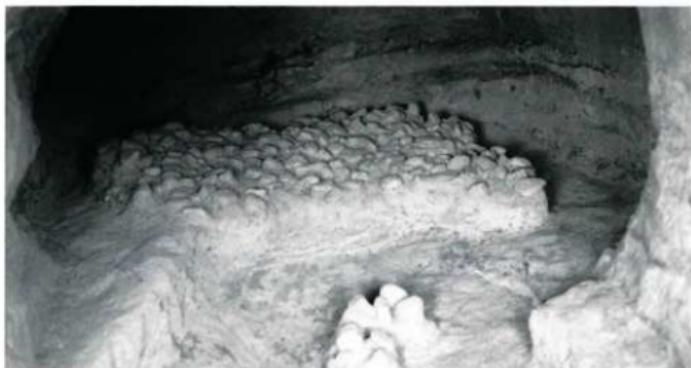
南坪B群10号墓（中央）・11号墓（右）全景



南坪B群12号墓全景



南坪B群13-A号墓（左）・13-B号墓（中央）・14-A号墓（右）全景



南坪B群13-A号墓砾床



南坪B群14-A号墓（左）·14-B号墓（右）墓前域全景



南坪B群15号墓全景



南坪B群15号墓砾床



南坪B群16号墓（左）・17号墓（右）全景



南坪B群17号墓砾床

新田・南坪横穴墓群発掘調査概要報告書
－市道建設に伴う緊急発掘調査－

昭和63年3月31日

編集発行 挂川市教育委員会
掛川市水垂51
TEL (0537) 24-7773

印刷所 株式会社 三 創
静岡市中村町166-1
TEL (0542) 82-4031

